若菜集

島崎藤村

こゝろなきうたのしらべは
ひとふさのぶだうのごとし
なさけあるてにもつまれて
あたゝかきさけとなるらむ

ぶだうだなふかくかゝれる
むらさきのそれにあらねど
こゝろあるひとのなさけに
かげにおくふさのみつよつ

そはうたのわかきゆゑなり

あぢはひもいろもあさくて
おほかたはかみてすつべき
うたゝねのゆめのそらごと

一　秋の思

秋

秋は来ぬ
秋は来ぬ

一葉(ひとは)は花は露ありて
風の来て弾(ひ)く琴の音に
青き葡萄(ぶどう)は紫の
自然の酒とかはりけり

秋は来ぬ
　秋は来ぬ
おくれさきだつ秋草(あきぐさ)も
みな夕霜(ゆふじも)のおきどころ
笑ひの酒を悲みの
盃(さかづき)にこそつぐべけれ

秋は来ぬ

秋は来ぬ
くさきも紅葉（もみぢ）するものを
たれかは秋に酔はざらめ
智恵（ちえ）あり顔のさみしさに
君笛を吹けわれはうたはむ

初恋

まだあげ初（そ）めし前髪（まへがみ）の

林檎（りんご）のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛（はなぐし）の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅（うすくれなゐ）の秋の実（み）に
人こひ初（そ）めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの
その髪の毛にかゝるとき

たのしき恋の盃を
君が情に酌みしかな

林檎畑の樹の下に
おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

狐のわざ

庭にかくるゝ小狐の

人なきときに夜（よる）いでて
秋の葡萄の樹の影に
しのびてぬすむつゆのふさ

恋は狐にあらねども
君は葡萄にあらねども
人しれずこそ忍びいで
君をぬすめる吾心（わがこころ）

髪を洗へば

髪を洗へば紫の
小草（をぐさ）のまへに色みえて
足をあぐれば花鳥（はなとり）の
われに随（したが）ふ風情（ふぜい）あり

目にながむれば彩雲（あやぐも）の
まきてはひらく絵巻物（えまきもの）
手にとる酒は美酒（うまざけ）の
若き愁（うれひ）をたゝふめり

耳をたつれば歌神（うたがみ）の

きたりて玉（たま）の簫（ふえ）を吹き
口をひらけばうたびとの
一ふしわれはこひうたふ

あゝかくまでにあやしくも
熱きこゝろのわれなれど
われをし君のこひしたふ
その涙にはおよばじな

君がこゝろは

君がこゝろは蟋蟀（こほろぎ）の
風にさそはれ鳴くごとく
朝影（あさかげ）清（きよ）き花草（はなぐさ）に
惜（を）しき涙をそゝぐらむ

それかきならす玉琴（たまごと）の
一つの糸のさはりさへ
君がこゝろにかぎりなき
しらべとこそはきこゆれ
あゝなどかくは触れやすき

君が優しき心もて
かくばかりなる吾(わが)こひに
触れたまはぬぞ恨(うら)みなる

傘(かさ)のうち

二人(ふたり)してさす一張(ひとはり)の
傘に姿をつゝむとも
情(なさけ)の雨のふりしきり
かわく間(ま)もなきたもとかな

顔と顔とをうちよせて
あゆむとすればなつかしや
梅花（ばいか）の油黒髪（くろかみ）の
乱れて匂（にほ）ふ傘のうち

恋の一雨（ひとあめ）ぬれまさり
ぬれてこひしき夢の間（ま）や
染めてぞ燃ゆる紅絹（もみ）うらの
雨になやめる足まとひ

歌ふをきけば梅川よ

しばし情（なさけ）を捨てよかし
いづこも恋に戯（たはぶ）れて
それ忠兵衛（ちゅうべえ）の夢がたり

こひしき雨よふらばふれ
秋の入日の照りそひて
傘の涙を乾（ほ）さぬ間（ま）に
手に手をとりて行きて帰らじ

秋に隠れて

わが手に植ゑし白菊の
おのづからなる時くれば
一もと花の暮陰（ゆふぐれ）に
秋に隠（かく）れて窓にさくなり
　　知るや君

こゝろもあらぬ秋鳥（あきどり）の
声にもれくる一ふしを
　　知るや君

深くも澄(す)める朝潮(あさじほ)の
底にかくるゝ真珠(しらたま)を
知るや君

あやめもしらぬやみの夜に
静(しづか)にうごく星くづを
知るや君

まだ弾(ひ)きも見ぬをとめごの
胸にひそめる琴の音(ね)を
知るや君

秋風の歌

さびしさはいつともわかぬ山里に
尾花みだれて秋かぜぞふく

しづかにきたる秋風の
西の海より吹き起り
舞ひたちさわぐ白雲（しらくも）の
飛びて行くへも見ゆるかな
暮影（ゆふかげ）高く秋は黄の

桐(きり)の梢(こずゑ)の琴の音(ね)に
そのおとなひを聞くときは
風のきたると知られけり

ゆふべ西風(にしかぜ)吹き落ちて
あさ秋の葉の窓に入り
あさ秋風の吹きよせて
ゆふべの鶉(うづら)巣に隠(かく)る

ふりさけ見れば青山(あをやま)も
色はもみぢに染めかへて

霜葉(しもば)をかへす秋風の
空(そら)の明鏡(かがみ)にあらはれぬ

清(すず)しいかなや西風の
まづ秋の葉を吹けるとき
さびしいかなや秋風の
かのもみぢ葉(ば)にきたるとき

道を伝ふる婆羅門(ばらもん)の
西に東に散るごとく
吹き漂蕩(ただよは)す秋風に

飄(ひるがへ)り行く木(こ)の葉(は)かな

朝羽(あさば)うちふる鷲鷹(わしたか)の
明闇天(あけくれそら)をゆくごとく
いたくも吹ける秋風の
羽(はね)に声あり力あり

見ればかしこし西風の
山の木(こ)の葉をはらふとき
悲しいかなや秋風の
秋の百葉(ももは)を落すとき

人は利剣(つるぎ)を振(ふる)へども
げにかぞふればかぎりあり
舌は時世(ときよ)をのゝしるも
声はたちまち滅ぶめり

高くも烈(はげ)し野も山も
息吹(いぶき)まどはす秋風よ
世をかれ〴〵となすまでは
吹きも休(や)むべきけはひなし

あゝうらさびし天地(あめつち)の
壺(つぼ)の中(うち)なる秋の日や
落葉と共に飄(ひるがへ)る
風の行衛(ゆくへ)を誰か知る

雲のゆくへ

庭にたちいでたゞひとり
秋海棠(しゅうかいどう)の花を分け
空ながむれば行く雲の
更(さら)に秘密を闡(ひら)くかな

小詩二首

一

ゆふぐれしづかに
　ゆめみんとて
よのわづらひより
　しばしのがる
きみよりほかには

しるものなき
花かげにゆきて
こひを泣きぬ
すぎこしゆめぢを
おもひみるに
こひこそつみなれ
つみこそこひ
いのりもつとめも
このつみゆゑ

たのしきそのへと
　　われはゆかじ
なつかしき君と
　　てをたづさへ
くらき冥府(よみ)までも
　　かけりゆかん

二

しづかにてらせる

月のひかりの
などか絶間なく
ものおもはする
さやけきそのかげ
こゑはなくとも
みるひとの胸に
忍び入るなり
なさけは説(と)くとも
なさけをしらぬ
うきよのほかにも

朽(く)ちゆくわがみ
あかさぬおもひと
　この月かげと
いづれか声なき
　いづれかなしき

強敵

一つの花に蝶(ちょう)と蜘蛛(くも)
小蜘蛛は花を守(まも)り顔
小蝶は花に酔ひ顔に

舞へども〳〵すべぞなき

花は小蜘蛛のためならば
小蝶の舞をいかにせむ
花は小蝶のためならば
小蜘蛛の糸をいかにせむ

やがて一つの花散りて
小蜘蛛はそこに眠れども
羽翼も軽き小蝶こそ
いづこともなくうせにけれ

別離

人妻をしたへる男の山に登り其
女の家を望み見てうたへるうた

誰(たれ)かとゞめん旅人(たびびと)の
あすは雲間(くもま)に隠るゝを
誰か聞くらん旅人の
あすは別れと告げましを
清(きよ)き恋とや片(かた)し貝(がひ)

われのみものを思ふより
恋はあふれて濁(にご)るとも
君に涙をかけましを

人妻(ひとづま)恋ふる悲しさを
君がなさけに知りもせば
せめてはわれを罪人(つみびと)と
呼びたまふこそうれしけれ

あやめもしらぬ憂(う)しや身は
くるしきこひの牢獄(ひとや)より

罪の鞭責(しもと)をのがれいで
こひて死なんと思ふなり

誰(たれ)かは花をたづねざる
誰かは色彩(いろ)に迷はざる
誰かは前にさける見て
花を摘(つ)まんと思はざる

恋の花にも戯(たはむ)るゝ
嫉妬(ねたみ)の蝶(ちょう)の身ぞつらき
二つの羽(はね)もをれ〱て

翼(つばさ)の色はあせにけり

人の命を春の夜の
夢といふこそうれしけれ
夢よりもいや〳〵深き
われに思ひのあるものを

梅の花さくころほひは
蓮(はす)さかばやと思ひわび
蓮の花さくころほひは
萩(はぎ)さかばやと思ふかな

待つまも早く秋は来（き）て
わが踏む道に萩さけど
濁（にご）りて待てる吾恋（わが）は
清き怨（うらみ）となりにけり

望郷

寺をのがれいでたる僧のうたひ
しそのうた

いざさらば

これをこの世のわかれぞと
のがれいでては住みなれし
御寺（みてら）の蔵裏（くり）の白壁（しらかべ）の
眼にもふたたび見ゆるかな

いざさらば
住めば仏のやどりさへ
火炎（ほのほ）の宅（いへ）となるものを
なぐさめもなき心より
流れて落つる涙かな

いざさらば
心の油濁るとも
ともしびたかくかきおこし
なさけは熱くもゆる火の
こひしき塵（ちり）にわれは焼けなむ

二　六人の処女（をとめ）

おえふ

処女（をとめ）ぞ経（へ）ぬるおほかたの
われは夢路（ゆめぢ）を越えてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山河（やまかは）をながむれば

水静（みづしづ）かなる江戸川の
ながれの岸にうまれいで
岸の桜の花影（はなかげ）に
われは処女（をとめ）となりにけり

都鳥（みやこどり）浮（う）く大川に
流れてそゝぐ川添（かはぞひ）の
白菫（しろすみれ）さく若草（わかぐさ）に
夢多かりし吾（わが）身かな

雲むらさきの九重（ここのへ）の
大宮内につかへして
清涼殿（せいりようでん）の春の夜（よ）の
月の光に照らされつ

雲を彫（ちりば）め濤（なみ）を刻（ほ）り

霞(かすみ)をうかべ日をまねく
玉の台(うてな)の欄干(おばしま)に
かゝるゆふべの春の雨

さばかり高き人の世の
耀(かがや)くさまを目にも見て
ときめきたまふさまぐの
ひとりのころもの香(か)をかげり

きらめき初(そ)むる暁星(あかぼし)の
あしたの空に動くごと

あたりの光きゆるまで
さかえの人のさまも見き

天(あま)つみそらを渡る日の
影かたぶけるごとくにて
名(な)の夕暮に消えて行く
秀(ひい)でし人の末路(はて)も見き

春しづかなる御園生(みそのふ)の
花に隠れて人を哭(な)き
秋のひかりの窓に倚(よ)り

夕雲とほき友を恋ふ

ひとりの姉をうしなひて
大宮内の門(かど)を出(い)で
けふ江戸川に来て見れば
秋はさみしきながめかな

桜の霜葉(しもは)黄に落ちて
ゆきてかへらぬ江戸川や
流れゆく水静かにて
あゆみは遅きわがおもひ

おのれも知らず世を経(ふ)れば
若き命(いのち)に堪へかねて
岸のほとりの草を藉(し)き
微笑(ほほゑ)みて泣く吾身かな

おきぬ

みそらをかける猛鷲(あらわし)の
人の処女(をとめ)の身に落ちて
花の姿に宿(やど)かれば

風雨(あらし)に渇(かわ)き雲に饑(う)ゑ
天翅(あまかけ)るべき術(すべ)をのみ
願ふ心のなかれとて
黒髪(くろかみ)長き吾身こそ
うまれながらの盲目(めしひ)なれ

芙蓉(ふよう)を前(さき)の身とすれば
泪(なみだ)は秋の花の露
小琴(をごと)を前(さき)の身とすれば
愁(うれひ)は細き糸の音
いま前(さき)の世は鷲の身の

処女にあまる羽翼(つばさ)かな

あゝあるときは吾心
あらゆるものをなげうちて
世はあぢきなき浅茅生(あさぢふ)の
茂れる宿(やど)と思ひなし
身は術(すべ)もなき蟋蟀(こほろぎ)の
夜(よる)の野草(のぐさ)にはひめぐり
たゞいたづらに音(ね)をたてて
うたをうたふと思ふかな

色（いろ）にわが身をあたふれば
処女のこゝろ鳥となり
恋に心をあたふれば
鳥の姿は処女にて
処女ながらも空（そら）の鳥
猛鷲（あらわし）ながら人の身の
天（あめ）と地（つち）とに迷ひゐる
身の定めこそ悲しけれ

おさよ

潮(うしほ)さみしき荒磯(あらいそ)の
巌陰(いはかげ)われは生れけり

あしたゆふべの白駒(しろごま)と
故郷(ふるさと)遠きものおもひ

をかしくものに狂へりと
われをいふらし世のひとの

げに狂はしの身なるべき
この年までの処女(をとめ)とは

うれひは深く手もたゆく
むすぼほれたるわが思（おもひ）

流れて熱（あつ）きわがなみだ
やすむときなきわがこゝろ

乱（みだ）れてものに狂ひよる
心を笛の音（ね）に吹かん

笛をとる手は火にもえて

うちふるひけり十（とを）の指
音（ね）にこそ渇（かわ）け口唇（くちびる）の
笛を尋（たづ）ぬる風情（ふぜい）あり

はげしく深きためいきに
笛の小竹（をだけ）や曇るらん

髪は乱れて落つるとも
まづ吹き入るゝ気息（いき）を聴（き）け

力をこめし一ふしに
黄楊(つげ)のさし櫛(ぐし)落ちてけり

吹けば流るゝ流るれば
笛吹き洗ふわが涙

短き笛の節(ふし)の間(ま)も
長き思(おもひ)のなからずや

七つの情(こころ)声を得て
音(ね)をこそきかめ歌神(うたがみ)も

われ喜(よろこび)を吹くときは
鳥も梢(こずゑ)に音(ね)をとゞめ
怒(いかり)をわれの吹くときは
瀬(せ)を行く魚も淵(ふち)にあり
われ哀(かなしみ)を吹くときは
獅子(しし)も涙をそゝぐらむ
われ楽(たのしみ)を吹くときは

虫も鳴く音(ね)をやめつらむ
愛のこゝろを吹くときは
流るゝ水のたち帰り
悪(にくみ)をわれの吹くときは
散り行く花も止(とどま)りて
慾(よく)の思(おもひ)を吹くときは
心の闇(やみ)の響(ひびき)あり

うたへ浮世（うきよ）の一ふしは
笛の夢路のものぐるひ
くるしむなかれ吾友（わが）よ
しばしは笛の音（ね）に帰れ
落つる涙をぬぐひきて
静かにきゝね吾笛を

おくめ

こひしきまゝに家を出(い)で
こゝの岸よりかの岸へ
越えましものと来て見れば
千鳥鳴くなり夕まぐれ

こひには親も捨てはてて
やむよしもなき胸の火や
鬢(びん)の毛を吹く河風よ
せめてあはれと思へかし

河波(かはなみ)暗く瀬を早み

流れて巌(いは)に砕(くだ)くるも
君を思へば絶間なき
恋の火炎(ほのほ)に乾(かわ)くべし

きのふの雨の小休(をやみ)なく
水嵩(みかさ)や高くまさるとも
よひ〱になくわがこひの
涙の滝におよばじな

しりたまはずやわがこひは
花鳥(はなとり)の絵にあらじかし

空鏡(かがみ)の印象(かたち)砂の文字
梢の風の音にあらじ

しりたまはずやわがこひは
雄々(をを)しき君の手に触れて
嗚呼(ああ)口紅(くちべに)をその口に
君にうつさでやむべきや

恋は吾身の 社(やしろ)にて
君は社の神なれば
君の祭壇(つくゑ)の上ならで

なにいのちを捧(ささ)げまし
砕(くだ)かば砕け河波(かはなみ)よ
われに命はあるものを
河波高く泳ぎ行き
ひとりの神にこがれなん

心のみかは手も足も
吾身はすべて火炎(ほのほ)なり
思ひ乱れて嗚呼恋の
千筋(ちすぢ)の髪の波に流るゝ

おつた

花仄(ほの)見ゆる春の夜の
すがたに似たる吾命(わがいのち)
朧々(おぼろおぼろ)に父母(ちちはは)は
二つの影と消えうせて
世に孤児(みなしご)の吾身こそ
影より出でし影なれや
たすけもあらぬ今は身は
若き聖(ひじり)に救はれて

人なつかしき前髪（まへがみ）の
処女（をとめ）とこそはなりにけれ

若き聖（ひじり）ののたまはく
時をし待たむ君ならば
かの柿の実をとるなかれ
かくいひたまふうれしさに
ことしの秋もはや深し
まづその秋を見よやとて
聖に柿をすゝむれば
その口唇（くちびる）にふれたまひ

かくも色よき柿ならば
などかは早くわれに告げこぬ

若き聖ののたまはく
人の命の惜(を)しからば
嗚呼(ああ)かの酒を飲むなかれ
かくいひたまふうれしさに
酒なぐさめの一つなり
まづその春を見よやとて
聖に酒をすゝむれば
夢の心地に酔ひたまひ

かくも楽しき酒ならば
などかは早くわれに告げこぬ

若き聖ののたまはく
道行き急ぐ君ならば
迷ひの歌をきくなかれ
かくいひたまふうれしさに
歌も心の姿なり
まづその声をきけやとて
一ふしうたひいでければ
聖は魂（たま）も酔ひたまひ

かくも楽しき歌ならば
などかは早くわれに告げこぬ

若き聖ののたまはく
まことをさぐる吾身なり
道の迷(まよひ)となるなかれ
かくいひたまふうれしさに
情(なさけ)も道の一つなり
かゝる思(おもひ)を見よやとて
わがこの胸に指ざせば
聖は早く恋ひわたり

かくも楽しき恋ならば
などかは早くわれに告げこぬ

それ秋の日の夕まぐれ
そゞろあるきのこゝろなく
ふと目に入るを手にとれば
雪より白き小石なり
若き聖ののたまはく
智恵の石とやこれぞこの
あまりに惜しき色なれば
人に隠して今も放(はな)たじ

おきく

くろかみながく
　　やはらかき
をんなごころを
　　たれかしる

をとこのかたる
　　ことのはを
まこととおもふ

ことなかれ
をとめごころの
あさくのみ
いひもつたふる
をかしさや
みだれてながき
鬢（びん）の毛を
黄楊（つげ）の小櫛（をぐし）に
かきあげよ

あゝ月（つき）ぐさの
　　きえぬべき
こひもするとは
　　たがことば
こひて死なんと
　　よみいでし
あつきなさけは
　　誰（た）がうたぞ

みちのためには
　　ちをながし
くにには死ぬる
　　をとこあり
治兵衛はいづれ
　　恋か名か
忠兵衛も名の
　　ために果(は)つ
あゝむかしより

こひ死にし
をとこのありと
しるや君
をんなごころは
いやさらに
ふかきなさけの
こもるかな
小春はこひに
ちをながし

梅川こひの
　ために死ぬ
お七はこひの
　ために焼け
高尾はこひの
　ために果つ
かなしからずや
　清姫は
蛇（へび）となれるも

こひゆゑに

やさしからずや
佐容姫（さよひめ）は
石となれるも
こひゆゑに

をとこのこひの
たはぶれは
たびにすてゆく
なさけのみ

こひするなかれ
　をとめごよ
かなしむなかれ
　わがともよ

こひするときと
　かなしみと
いづれかながき
　いづれみじかき

三　生のあけぼの

草枕

夕波くらく啼(な)く千鳥
われは千鳥にあらねども
心の羽(はね)をうちふりて
さみしきかたに飛べるかな

若き心の一筋（ひとすぢ）に
なぐさめもなくなげきわび
胸の氷のむすぼれて
とけて涙となりにけり

蘆葉（あしは）を洗ふ白波の
流れて巌（いは）を出づるごと
思ひあまりて草枕
まくらのかずの今いくつ

かなしいかなや人の身の

なきなぐさめを尋(たづ)ね侘(わ)び
道なき森に分け入りて
などなき道をもとむらん

われもそれかやうれひかや
野末(のずゑ)に山に谷蔭(たにかげ)に
見るよしもなき朝夕の
光もなくて秋暮れぬ

想(おもひ)も薄く身も暗く
残れる秋の花を見て

行くへもしらず流れ行く
水に涙の落つるかな

身を朝雲（あさぐも）にたとふれば
ゆふべの雲の雨となり
身を夕雨（ゆふあめ）にたとふれば
あしたの雨の風となる

されば落葉と身をなして
風に吹かれて飄（ひるがへ）り
朝の黄雲（きぐも）にともなはれ

夜(よる)白河を越えてけり

道なき今の身なればか
われは道なき野を慕ひ
思ひ乱れてみちのくの
宮城野(みやぎの)にまで迷ひきぬ

心の宿(やど)の宮城野よ
乱れて熱き吾(わが)身には
日影も薄く草枯れて
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は
吹く北風を琴（こと）と聴（き）き
悲み深き吾目には
色彩（いろ）なき石も花と見き

あゝ孤独（ひとりみ）の悲痛（かなしさ）を
味ひ知れる人ならで
誰（たれ）にかたらん冬の日の
かくもわびしき野のけしき

都のかたをながむれば
空冬雲に覆（おほ）はれて
身にふりかゝる 玉霰（たまあられ）
袖（そで）の氷と閉ぢあへり

みぞれまじりの風勁（つよ）く
小川の水の薄氷
氷のしたに音するは
流れて海に行く水か

啼（な）いて羽風（はかぜ）もたのもしく

雲に隠るゝかさゝぎよ
光もうすき寒空（さむぞら）の
汝（なれ）も荒れたる野にむせぶ

涙も凍る冬の日の
光もなくて暮れ行けば
人めも草も枯れはてて
ひとりさまよふ吾身かな

かなしや酔ふて行く人の
踏めばくづるゝ霜柱

なにを酔ひ泣く忍び音（ね）に
声もあはれのその歌は

うれしや物の音（ね）を弾（ひ）きて
野末をかよふ人の子よ
声調（しらべ）ひく手も凍りはて
なに門（かど）づけの身の果（はて）ぞ

やさしや年もうら若く
まだ初恋のまじりなく
手に手をとりて行く人よ

なにを隠るゝその姿
野のさみしさに堪へかねて
霜と霜との枯草の
道なき道をふみわけて
きたれば寒し冬の海

朝は海辺（うみべ）の石の上（へ）に
こしうちかけてふるさとの
都のかたを望めども
おとなふものは濤（なみ）ばかり

暮はさみしき荒磯(あらいそ)の
潮(うしほ)を染めし砂に伏し
日の入るかたをながむれど
湧(わ)きくるものは涙のみ

さみしいかなや荒波の
岩に砕(くだ)けて散れるとき
かなしいかなや冬の日の
潮(うしほ)とともに帰るとき

誰(たれ)か波路を望み見て
そのふるさとを慕はざる
誰か潮の行くを見て
この人の世を惜(をし)まざる

暦(こよみ)もあらぬ荒磯の
砂路にひとりさまよへば
みぞれまじりの雨雲の
落ちて潮となりにけり

遠く湧きくる海の音

慣れてさみしき吾耳に
怪しやもるゝものの音（ね）は
まだうらわかき野路の鳥

嗚呼（ああ）めづらしのしらべぞと
声のゆくへをたづぬれば
緑の羽（はね）もまだ弱き
それも初音（はつね）か　鶯（うぐひす）の

春きにけらし春よ春
まだ白雪の積れども

若菜の萌(も)えて色青き
こゝちこそすれ砂の上(へ)に

春きにけらし春よ春
うれしや風に送られて
きたるらしとや思へばか
梅が香(か)ぞする海の辺(べ)に

磯辺に高き大巌(おほいは)の
うへにのぼりてながむれば
春やきぬらん東雲(しののめ)の

潮（しほ）の音（ね）遠き朝ぼらけ

春

一　たれかおもはむ

たれかおもはむ　鶯（うぐひす）の
涙もこほる冬の日に
若き命は春の夜の
花にうつろふ夢の間（ま）と

あゝよしさらば美酒(うまざけ)に
うたひあかさん春の夜を

梅のにほひにめぐりあふ
春を思へばひとしれず
からくれなゐのかほばせに
流れてあつきなみだかな
あゝよしさらば花影に
うたひあかさん春の夜を

わがみひとつもわすられて

おもひわづらふこゝろだに
春のすがたをとめくれば
たもとににほふ梅の花
あゝよしさらば琴（こと）の音（ね）に
うたひあかさん春の夜を

二　あけぼの

紅（くれなゐ）細くたなびけたる
雲とならばやあけぼのの
　　　　　雲とならばや

やみを出(い)でては光ある
空とならばやあけぼのの
　　空とならばや

春の光を彩(いろど)れる
水とならばやあけぼのの
　　水とならばや

鳩(はと)に履(ふ)まれてやはらかき
草とならばやあけぼのの

草とならばや

三　春は来ぬ

春はきぬ
　春はきぬ
初音（はつね）やさしきうぐひすよ
こぞに別離（わかれ）を告げよかし
谷間に残る白雪よ
葬りかくせ去歳（こぞ）の冬

春はきぬ
　春はきぬ
さみしくさむくことばなく
まづしくくらくひかりなく
みにくゝおもくちからなく
かなしき冬よ行きねかし

春はきぬ
　春はきぬ
浅みどりなる新草（にひぐさ）よ
とほき野面（のもせ）を画（ゑが）けかし

さきては紅(あか)き春花(はるばな)よ
樹々(きぎ)の梢(こずゑ)を染めよかし

春はきぬ
　　春はきぬ

霞(かすみ)よ雲よ動(ゆる)ぎいで
氷れる空をあたゝめよ
花の香(か)おくる春風よ
眠れる山を吹きさませ

春はきぬ

春はきぬ
春をよせくる朝汐（あさじほ）よ
蘆（あし）の枯葉（かれは）を洗ひ去れ
霞に酔へる雛鶴（ひなづる）よ
若きあしたの空に飛べ

春はきぬ
春はきぬ
うれひの芹（せり）の根を絶えて
氷れるなみだ今いづこ
つもれる雪の消えうせて

けふの若菜と萌(も)えよかし

四　眠れる春よ

ねむれる春ようらわかき
かたちをかくすことなかれ
たれこめてのみけふの日を
なべてのひとのすぐすまに
さめての春のすがたこそ
また夢のまの風情(ふぜい)なれ

ねむげの春よさめよ春
さかしきひとのみざるまに
若紫の朝霞
かすみの袖(そで)をみにまとへ
はつねうれしきうぐひすの
鳥のしらべをうたへかし

ねむげの春よさめよ春
ふゆのこほりにむすぼれし
ふるきゆめぢをさめいでて
やなぎのいとのみだれがみ

うめのはなぐしさしそへて
びんのみだれをかきあげよ

ねむげの春よさめよ春
あゆめばたにの早(さ)わらびの
したもえいそぐ汝(な)があしを
かたくもあげよあゆめ春
たえなるはるのいきを吹き
こぞめの梅の香ににほへ

五　うてや鼓

うてや鼓（つづみ）の春の音
雪にうもるゝ冬の日の
かなしき夢はとざされて
世は春の日とかはりけり

ひけばこぞめの春霞
かすみの幕をひきとぢて
花と花とをぬふ糸は
けさもえいでしあをやなぎ

霞のまくをひきあけて
春をうかゞふことなかれ
はなさきにほふ蔭をこそ
春の台（うてな）といふべけれ

小蝶（こちょう）よ花にたはぶれて
優しき夢をみては舞ひ
酔（ゑ）ふて羽袖（はそで）もひら〳〵と
はるの姿をまひねかし
緑のはねのうぐひすよ

梅の花笠ぬひそへて
ゆめ静(しづか)なるはるの日の
しらべを高く歌へかし

小詩

くめどつきせぬ
わかみづを
きみとくまゝし
かのいづみ

かわきもしらぬ
わかみづを
きみとのまゝし
かのいづみ

かのわかみづと
みをなして
はるのこゝろに
わきいでん

かのわかみづと

みをなして
きみとながれん
花のかげ

明星

浮べる雲と身をなして
あしたの空(そら)に出でざれば
などしるらめや明星の
光の色のくれなゐを

朝の潮（うしほ）と身をなして
流れて海に出でざれば
などしるらめや明星の
清（す）みて哀（かな）しききらめきを

なにかこひしき暁星（あかぼし）の
空（むな）しき天（あま）の戸を出でて
深くも遠きほとりより
人の世近く来（きた）るとは

潮（うしほ）の朝のあさみどり

水底（みなそこ）深き白石を
星の光に透（す）かし見て
朝の齢（よはひ）を数ふべし

野の鳥ぞ啼（な）く山河（やまかは）も
ゆふべの夢をさめいでて
細く棚引（たなび）くしのゝめの
姿をうつす朝ぼらけ

小夜（さよ）には小夜のしらべあり
朝には朝の音（ね）もあれど

星の光の糸の緒（を）に
あしたの琴（こと）は静（しづか）なり

まだうら若き朝の空
きらめきわたる星のうち
いと〳〵若き光をば
名（なづ）けましかば明星と

潮音

わきてながるゝ

やほじほの
そこにいざよふ
うみの琴
しらべもふかし
もゝかはの
よろづのなみを
よびあつめ
ときみちくれば
うらゝかに
とほくきこゆる
はるのしほのね

酔歌

旅と旅との君や我
君と我とのなかなれば
酔ふて袂(たもと)の歌草(うたぐさ)を
醒(さ)めての君に見せばやな

若き命も過ぎぬ間(ま)に
楽しき春は老いやすし
誰(た)が身にもてる宝(たから)ぞや

君くれなゐのかほばせは
君がまなこに涙あり
君が眉には憂愁（うれひ）あり
堅（かた）く結べるその口に
それ声も無きなげきあり

名もなき道を説（と）くなかれ
名もなき旅を行くなかれ
甲斐（かひ）なきことをなげくより
来（きた）りて美（うま）き酒に泣け

光もあらぬ春の日の
独りさみしきものぐるひ
悲しき味の世の智恵に
老いにけらしな旅人よ

心の春の燭火（ともしび）に
若き命を照らし見よ
さくまを待たで花散らば
哀（かな）しからずや君が身は

わきめもふらで急ぎ行く
君の行衛（ゆくへ）はいづこぞや
琴花酒（ことはなさけ）のあるものを
とゞまりたまへ旅人よ

二つの声

朝

たれか聞くらん朝の声
眠（ねむり）と夢を破りいで

彩(あや)なす雲にうちのりて
よろづの鳥に歌はれつ
天のかなたにあらはれて
東の空に光あり
そこに時(とき)あり始(はじめ)あり
そこに道あり力あり
そこに色あり詞(ことば)あり
そこに声あり命あり
そこに名ありとうたひつゝ
みそらにあがり地にかけり
のこんの星ともろともに

光のうちに朝ぞ隠るゝ

暮

たれか聞くらん暮の声
霞の翼（つばさ）雲の帯
煙の衣（ころも）露の袖（そで）
つかれてなやむあらそひを
闇のかなたに投げ入れて
夜の使（つかひ）の蝙蝠（かはほり）の
飛ぶ間も声のをやみなく

こゝに影あり 迷（まよひ）あり
こゝに夢あり 眠（ねむり）あり
こゝに闇あり休息（やすみ）あり
こゝに永（なが）きあり遠きあり
こゝに死ありとうたひつゝ
草木にいこひ野にあゆみ
かなたに落つる日とともに
色なき闇に暮ぞ隠るゝ

哀歌

中野逍遙をいたむ

『秀才香骨幾人憐、秋入長安夢愴然、琴台旧譜壚前柳、風流銷尽二千年』、これ中野逍遙が秋怨十絶（しゅうえんじゅうぜつ）の一なり。逍遙字は威卿、小字重太郎、予州宇和島の人なりといふ。文科大学の異材なりしが年僅（わづ）かに二十七にしてうせぬ。逍遙遺稿正外二篇、みな紅心の余唾にあらざるはなし。左に掲ぐるはかれの清怨を写せしもの、『寄語残月休長嘆、我輩亦是艶生涯』、合せかゝげてこの秀才を追慕するのこゝろをとゞむ。

思君九首

中野逍遙

思君我心傷
中夜坐松蔭

思君我心悄
昨夜涕涙流

示君錦字詩
忽覚筆端香

為君調綺羅

思君我容瘁
露華多似涙

思君我腸裂
今朝尽成血

寄君鴻文冊
窻外梅花白

為君築金屋

中有鴛鴦図

贈君名香篋
休将秋扇掩

贈君双臂環
一鐫不乖約

訪君過台下
佇門不敢入

長春夢百禄

応記韓寿恩
明月照眉痕

宝玉価千金
一題勿変心

清宵琴響揺
恐乱月前調

千里囀金鶯　春風吹緑野
忽発頭屋桃　似君三両朶

嬌影三分月　芳花一朶梅
渾把花月秀　作君玉膚堆

かなしいかなや流れ行く
水になき名をしるすとて
今はた残る歌反古（うたほご）の
ながき愁（うれ）ひをいかにせむ

かなしいかなやする墨（すみ）の
いろに染めてし花の木の
君がしらべの歌の音に
薄き命のひゞきあり

かなしいかなや前（さき）の世は
みそらにかゝる星の身の
人の命のあさぼらけ
光も見せでうせにしよ

かなしいかなや同じ世に

生れいでたる身を持ちて
友の契（ちぎ）りも結ばずに
君は早くもゆけるかな

すゞしき眼（まなこ）つゆを帯び
葡萄（ぶどう）のたまとまがふまで
その面影をつたへては
あまりに妬（ねた）き姿かな

同じ時世（ときよ）に生れきて
同じいのちのあさぼらけ

君からくれなゐの花は散り
われ命あり八重葎(やへむぐら)

かなしいかなやうるはしく
さきそめにける花を見よ
いかなればかくとゞまらで
待たで散るらんさける間(ま)も

かなしいかなやうるはしき
なさけもこひの花を見よ
いと〳〵清きそのこひは

消ゆとこそ聞けいと早く

君し花とにあらねども
いな花よりもさらに花
君しこひとにあらねども
いなこひよりもさらにこひ

かなしいかなや人の世に
あまりに惜しき才（ざえ）なれば
病（やまひ）に塵（ちり）に悲（かなしみ）に
死にまでそしりねたまるゝ

かなしいかなやはたとせの
ことばの海のみなれ棹（ざを）
磯にくだくる高潮（たかじほ）の
うれひの花とちりにけり

かなしいかなや人の世の
きづなも捨てて嘶（いなな）けば
つきせぬ草に秋は来て
声も悲しき天の馬

かなしいかなや音（ね）を遠み
流るゝ水の岸にさく
ひとつの花に照らされて
飄（ひるがへ）り行く一葉舟（ひとはぶね）

四　深林の逍遥（しょうよう）、其他

深林の逍遥

力を刻（きざ）む木匠（こだくみ）の
うちふる斧のあとを絶え
春の草花彫刻（くさばなほりもの）の
鑿（のみ）の韻（にほひ）もとゞめじな
いろさま〴〵の春の葉に
青一筆（あをひとふで）の痕（あと）もなく
千枝（ちえ）にわかるゝ赤樟（あかくす）も
おのづからなるすがたのみ
檜（ひのき）は荒し杉直し
五葉は黒し椎（しひ）の木の
枝をまじゆる白樫（しらかし）や

樗（あふち）は茎をよこたへて
枝と枝とにもゆる火の
なかにやさしき　若楓（わかかへで）

山精（やまびこ）

ひとにしられぬ
たのしみの
ふかきはやしを
たれかしる

ひとにしられぬ
はるのひの
かすみのおくを
たれかしる

木精（こだま）

はなのむらさき
はのみどり
うらわかぐさの
のべのいと

たくみをつくす
大機（おほはた）の
梭（をさ）のはやしに
きたれかし

山精

かのもえいづる
くさをふみ
かのわきいづる

みづをのみ

かのあたらしき
はなにゑひ
はるのおもひの
なからずや

木精

ふるきころもを
ぬぎすてて

はるのかすみを
まとへかし

なくうぐひすの
ねにいでて
ふかきはやしに
うたへかし

あゆめば蘭(らん)の花を踏み
ゆけば楊梅(やまもも)袖に散り
袂(たもと)にまとふ山葛(やまくづ)の

葛のうら葉をかへしては
女蘿(ひかげ)の蔭のやまいちご
色よき実こそ落ちにけれ
岡やまつゞき隈々(くまぐま)も
いとなだらかに行き延(の)びて
ふかきはやしの谷あひに
乱れてにほふふぢばかま
谷に花さき谷にちり
人にしられず朽(く)つるめり
せまりて暗き峡(はざま)より
やゝひらけたる深山木(みやまぎ)の

春は小枝(こえだ)のたゝずまひ
しげりて広き熊笹の
葉末をふかくかきわけて
谷のかなたにきて見れば
いづくに行くか滝川よ
声もさびしや白糸の
青き巌(いはほ)に流れ落ち
若き猿(ましら)のためにだに
音(おと)をとゞむる時ぞなき

山精

ゆふぐれかよふ
たびびとの
むねのおもひを
たれかしる

友にもあらぬ
やまかはの
はるのこゝろを
たれかしる

木精

夜をなきあかす
かなしみの
まくらにつたふ
なみだこそ

ふかきはやしの
たにかげの
そこにながるゝ
しづくなれ

山精

鹿はたふるゝ
たびごとに
妻こふこひに
かへるなり

のやまは枯るゝ
たびごとに
ちとせのはるに

かへるなり

木精

ふるきおちばを
やはらかき
青葉のかげに
葬れよ

ふゆのゆめぢを
さめいでて

はるのはやしに
きたれかし

今しもわたる深山（みやま）かぜ
春はしづかに吹きかよふ
林の簫（しょう）の音（ね）をきけば
風のしらべにさそはれて
みれどもあかぬ白妙（しろたへ）の
雲の羽袖（はそで）の深山木の
千枝（ちえだ）にかゝりたちはなれ
わかれ舞ひゆくすがたかな

樹々（きぎ）をわたりて行く雲の
しばしと見ればあともなき
高き行衛（ゆくへ）にいざなはれ
千々にめぐれる巌影（いはかげ）の
花にも迷ひ石に倚（よ）り
流るゝ水の音をきけば
山は危ふく石わかれ
削（けづ）りてなせる青巌（あをいは）に
砕けて落つる飛潭（たきみづ）の
湧きくる波の瀬を早み
花やかにさす春の日の

光烱（ひかり）照りそふ水けぶり
独り苔（こけ）むす岩を攀（よ）ぢ
ふるふあゆみをふみしめて
浮べる雲をうかゞへば
下にとゞろく飛潭（たきみづ）の
澄むいとまなき岩波は
落ちていづくに下るらん

山精

なにをいざよふ

むらさきの
ふかきはやしの
はるがすみ

なにかこひしき
いはかげを
ながれていづる
いづみがは

木精

かくれてうたふ
野の山の
こゑなきこゑを
きくやきみ

つゝむにあまる
はなかげの
水のしらべを
しるやきみ

山精

あゝながれつゝ
こがれつゝ
うつりゆきつゝ
うごきつゝ

あゝめぐりつゝ
かへりつゝ
うちわらひつゝ
むせびつゝ

木精

いまひのひかり
はるがすみ
いまはなぐもり
はるのあめ

あゝあゝはなの
つゆに酔ひ
ふかきはやしに
うたへかし

ゆびをりくればいつたびも
かはれる雲をながむるに
白きは黄なりなにをかも
もつ筆にせむ色彩（いろあや）の
いつしか淡く茶を帯びて
雲くれなゐとかはりけり
あゝゆふまぐれわれひとり
たどる林もひらけきて
いと静かなる湖の
岸辺にさける花躑躅（はなつつじ）

うき雲ゆけばかげ見えて
水に沈める春の日や
それ紅（くれなゐ）の色染めて
雲紫（むらさき）となりぬれば
かげさへあかき水鳥の
春のみづうみ岸の草
深き林や花つゝじ
迷ふひとりのわがみだに
深紫（ふかむらさき）の紅（くれなゐ）の
彩（あや）にうつろふ夕まぐれ

母を葬るのうた

うき雲はありともわかぬ大空の
月のかげよりふるしぐれかな

きみがはかばに
きゞくあり
きみがはかばに
さかきあり

くさはにつゆは
しげくして

おもからずやは
　　そのしるし
いつかねむりを
　　さめいでて
いつかへりこん
　　わがはゝよ
紅羅（あから）ひく子も
　　ますらをも
みなちりひぢと

なるものを

あゝさめたまふ
ことなかれ
あゝかへりくる
ことなかれ

はるははなさき
はなちりて
きみがはかばに
かゝるとも

なつはみだるゝ
　ほたるびの
きみがはかばに
　とべるとも

あきはさみしき
　あきさめの
きみがはかばに
　そゝぐとも

ふゆはましろに
　　ゆきじもの
きみがはかばに
　　こほるとも

とほきねむりの
　　ゆめまくら
おそるゝなかれ
　　わがはゝよ

合唱

一　暗香（あんこう）

はるのよはひかりはかりとおもひしを
しろきやうめのさかりなるらむ

姉

わかきいのちの
をしければ
やみにも春の
香（か）に酔はん

せめてこよひは
　　さほひめよ
はなさくかげに
　　うたへかし

妹

そらもゑへりや
　　はるのよは
ほしもかくれて

みえわかず
よめにもそれと
ほのしろく
みだれてにほふ
うめのはな

姉

はるのひかりの
こひしさに

かたちをかくす
　　うぐひすよ
はなさへしるき
　　はるのよの
やみをおそるゝ
　　ことなかれ

妹

うめをめぐりて

ゆくみづの
やみをながるゝ
せゝらぎや
ゆめもさそはぬ
香（か）なりせば
いづれかよるに
にほはまし

姉

こぞのこよひは
わがともの
うすこうばいの
そめごろも
ほかげにうつる
さかづきを
こひのみゑへる
よなりけり

妹

こぞのこよひは
　　わがともの
なみだをうつす
　　よのなごり

かげもかなしや
　　木下川(きねがは)に
うれひしづみし
　　よなりけり

姉

こぞのこよひは
　　わがともの
おもひははるの
　　よのゆめや
よをうきものに
　　いでたまふ
ひとめをつゝむ
　　よなりけり

妹

こぞのこよひは
　　わがともの
そでのかすみの
　　はなむしろ
ひくやことのね
　　たかじほを
うつしあはせし

よなりけり

姉

わがみぎのてに
くらぶれば
やさしきなれが
たなごころ
ふるればいとゞ
やはらかに

もゆるかあつく
　　おもほゆる

妹

もゆるやいかに
　　こよひはと
とひたまふこそ
　　うれしけれ
しりたまはずや

うめがかに
わがうまれてし
はるのよを

二　蓮花舟（れんげぶね）

しは〳〵もこほるゝつゆははちすはの
うきはにのみもたまりけるかな

姉

あゝはすのはな

はすのはな
かげはみえけり
いけみづに
ひとつのふねに
さをさして
うきはをわけて
こぎいでん

妹

かぜもすゞしや
　　はがくれに
そこにもしろし
　　はすのはな

こゝにもあかき
　　はすばなの
みづしづかなる
　　いけのおも

姉

はすをやさしみ
　はなをとり
そでなひたしそ
　いけみづに
ひとめもはぢよ
　はなかげに
なれが乳房（ちぶさ）の
　あらはるゝ

妹

ふかくもすめる
　いけみづの
葉にすれてゆく
　みなれざを

なつぐもゆけば
　かげみえて
はなよりはなを
　わたるらし

姉

荷葉（はすは）にうたひ
　ふねにのり
はなつみのする
　なつのゆめ
はすのはなふね
　さをとめて
なにをながむる

そのすがた

妹

なみしづかなる
はなかげに
きみのかたちの
うつるかな
きみのかたちと
なつばなと

いづれうるはし
　いづれやさしき

三　葡萄（ぶどう）の樹（き）のかげ

はるあきにおもひみたれてわきかねつ
　ときにつけつゝうつるこゝろは

妹

たのしからずや
　はなやかに

あきはいりひの
　　てらすとき
たのしからずや
　　ぶだうばの
はごしにくもの
　　かよふとき
　　　姉
やさしからずや

むらさきの
ぶだうのふさの
かゝるとき
やさしからずや
にひぼしの
ぶだうのたまに
うつるとき

妹

かぜはしづかに
そらすみて
あきはたのしき
ゆふまぐれ
いつまでわかき
をとめごの
たのしきゆめの
われらぞや

姉

あきのぶだうの
　　きのかげの
いかにやさしく
　　ふかくとも
てにてをとりて
　　かげをふむ
なれとわかれて
　　なにかせむ

妹

げにやかひなき
　くりごとも
ぶだうにしかじ
　ひとふさの
われにあたへよ
　ひとふさを
そこにかゝれる
　むらさきの

姉

われをしれかし
　　えだたかみ
とゞかじものを
　　かのふさは
はかげのたまに
　　てはふれて
わがさしぐしの

おちにけるかな

四　高楼（たかどの）

わかれゆくひとををしむとこよひより
　とほきゆめちにわれやまとはん

妹

とほきわかれに
　たへかねて
このたかどのに

のぼるかな

かなしむなかれ
わがあねよ
たびのころもを
とゝのへよ

姉

わかれといへば
むかしより

このひとのよの
　つねなるを
ながるゝみづを
　ながむれば
ゆめはづかしき
　なみだかな

妹

したへるひとの

もとにゆく
きみのうへこそ
たのしけれ
ふゆやまこえて
きみゆかば
なにをひかりの
わがみぞや

姉

あゝはなとりの
いろにつけ
ねにつけわれを
おもへかし
けふわかれては
いつかまた
あひみるまでの
いのちかも

妹

きみがさやけき
めのいろも
きみくれなゐの
くちびるも
きみがみどりの
くろかみも
またいつかみん
このわかれ

姉

なれがやさしき
　なぐさめも
なれがたのしき
　うたごゑも
なれがこゝろの
　ことのねも
またいつきかん
　このわかれ

妹

きみのゆくべき
やまかはは
おつるなみだに
みえわかず
そでのしぐれの
ふゆのひに
きみにおくらん

はなもがな

姉

そでにおほへる
うるはしき
ながかほばせを
あげよかし
ながくれなゐの
かほばせに

ながるゝなみだ
　　われはぬぐはん

梭(をさ)の音(ね)

梭の音を聞くべき人は今いづこ
心を糸により初(そ)めて
涙ににじむ木綿(もめん)縞
やぶれし窗(まど)に身をなげて
暮れ行く空をながむれば
ねぐらに急ぐ 村鴉(むらがらす)

連(つれ)にはなれて飛ぶ一羽
あとを慕ふてかあ〳〵と

かもめ

波に生れて波に死ぬ
情(なさけ)の海のかもめどり
恋の激浪(おほなみ)たちさわぎ
夢むすぶべきひまもなし
闇(くら)き潮(うしほ)の驚きて

流れて帰るわだつみの
鳥の行衛（ゆくへ）も見えわかぬ
波にうきねのかもめどり

流星

門（かど）にたち出（い）でたゞひとり
人待ち顔のさみしさに
ゆふべの空をながむれば
雲の宿りも捨てはてて
何かこひしき人の世に

流れて落つる星一つ

君と遊ばん

君と遊ばん夏の夜の
青葉の影の下すゞみ
短かき夢は結ばずも
せめてこよひは歌へかし

雲となりまた雨となる
昼の愁（うれ）ひはたえずとも

星の光をかぞへ見よ
楽（たのし）みのかず夜（よ）は尽きじ

夢かうつゝか天（あま）の川（がは）
星に仮寝の織姫の
ひゞきもすみてこひわたる
梭（をさ）の遠音（とほね）を聞かめやも

昼の夢

花橘（はなたちばな）の袖（そで）の香（か）の

みめうるはしきをとめごは
真昼(まひる)に夢を見てしより
さめて忘るゝ夜のならひ
白日(まひる)の夢のなぞもかく
忘れがたくはありけるものか

ゆめと知りせばなまなかに
さめざらましを世に出(い)でて
うらわかぐさのうらわかみ
何をか夢の名残ぞと
問はゞ答へん目さめては

熱き涙のかわく間もなし

東西南北

男ごころをたとふれば
つよくもくさをふくかぜか
もとよりかぜのみにしあれば
きのふは東けふは西

女ごころをたとふれば
かぜにふかるゝくさなれや

もとよりくさのみにしあれば
きのふは南けふは北

懐古

天(あま)の河原(かはら)にやほよろづ
ちよろづ神のかんつどひ
つどひいませしあめつちの
始(はじめ)のときを誰(たれ)か知る
それ大神(おほがみ)の天雲(あまぐも)の

八重かきわけて行くごとく
野の鳥ぞ啼(な)く東路(あづまぢ)の
碓氷(うすひ)の山にのぼりゆき

日は照らせども影ぞなき
吾妻(あがつま)はやとこひなきて
熱き涙をそゝぎてし
尊(みこと)の夢は跡も無し

大和(やまと)の国の高市(たかいち)の
雷山(いかづちやま)に御幸(みゆき)して

天雲（あまぐも）のへにいほりせる
御輦（くるま）のひゞき今いづこ

目をめぐらせばさゞ波や
志賀の都は荒れにしと
むかしを思ふ歌人（うたびと）の
澄める 怨（うらみ）をなにかせん

春は霞（かす）める高台（たかどの）に
のぼりて見ればけぶり立つ
民のかまどのながめさへ

消えてあとなき雲に入る
冬はしぐるゝ九重（ここのへ）の
大宮内のともしびや
さむさは雪に凍る夜の
竜（たつ）のころもはいろもなし

むかしは遠き船いくさ
人の血潮（ちしほ）の流るとも
今はむなしきわだつみの
まん〳〵としてきはみなし

むかしはひろき関が原
つるぎに夢を争へど
今は寂(さび)しき草のみぞ
ばう〳〵としてはてもなき

われ今(いま)秋の野にいでて
奥山(おくやま)高くのぼり行き
都のかたを眺むれば
あゝあゝ熱きなみだかな

白壁（しらかべ）

たれかしるらん花ちかき
高楼（たかどの）われはのぼりゆき
みだれて熱きくるしみを
うつしいでけり白壁に

唾（つば）にしるせし文字なれば
ひとしれずこそ乾きけれ
あゝあゝ白き白壁に
わがうれひありなみだあり

四つの袖（そで）

をとこの気息（いき）のやはらかき
お夏の髪にかゝるとき
をとこの早きためいきの
霰（あられ）のごとくはしるとき

をとこの熱き手の掌（ひら）の
お夏の手にも触るゝとき
をとこの涙ながれいで

お夏の袖にかゝるとき
をとこの黒き目のいろの
お夏の胸に映るとき
をとこの紅(あか)き口唇(くちびる)の
お夏の口にもゆるとき

人こそしらね嗚呼(ああ)恋の
ふたりの身より流れいで
げにこがるれど慕へども
やむときもなき清十郎

天馬

序

老（おい）は若（わかき）は越（こ）しかたに
文（ふみ）に照らせどまれらなる
奇（く）しきためしは箱根山
弥生（やよひ）の末のゆふまぐれ
南の天（あま）の戸（と）をいでて
よな〳〵北の宿に行く

血の深紅(くれなゐ)の星の影
かたくなりし男さへ
星の光を眼に見ては
身にふりかゝる凶禍(まがごと)の
天の兆(しるし)とうたがへり
総鳴(そうなき)に鳴く鶯(うぐひす)の
にほひいでたる声をあげ
さへづり狂ふ音(ね)をきけば
げにめづらしき春の歌
春を得知らぬ処女(をとめ)さへ
かのうぐひすのひとこゑに

枕の紙のしめりきて
人なつかしきおもひあり
まだ時ならぬ白百合の
籬（まがき）の陰にさける見て
九十九（つくも）の翁（おきな）うつし世の
こゝろの慾の夢を恋ひ
音（ね）をだにきかぬ雛鶴（ひなづる）の
軒（のき）の榎樹（えのき）に来て鳴けば
寝覚（ねざめ）の老媼（おうな）後の世の
花の台（うてな）に泣きまどふ
空にかゝれる星のいろ

春さきかへる夏花（なつはな）や
是（これ）わざはひにあらずして
よしや兆（しるし）といへるあり
なにを酔ひ鳴く春鳥（はるどり）よ
なにを告げくる鶴の声
それ鳥の音（ね）に卜（うらな）ひて
よろこびありと祝ふあり
高き聖（ひじり）のこの村に
声をあげさせたまふらん
世を傾けむ麗人（よきひと）の
茂れる賤（しづ）の春草（はるぐさ）に

いでたまふかとのゝしれど
誰かしるらん新星(にひぼし)の
まことの北をさししめし
さみしき蘆(あし)の　湖(みづうみ)　の
沈める水に映(う)つるとき
名もなき賤の片びさし
春の夜風の音を絶え
村の南のかたほとり
その夜生れし牝(め)の馬は
流るゝ水の藍染(あゐぞめ)の
青毛(あをげ)やさしき姿なり

北に生れし雄(を)の馬の
栗毛にまじる紫は
色あけぼのの春霞
光をまとふ風情(ふぜい)あり
星のひかりもをさまりて
噂(うはさ)に残る鶴の音や
啼く鶯に花ちれば
嗚呼この村に生れてし
馬のありとや問ふ人もなし

雄馬(をうま)

あな天雲（あまぐも）にともなはれ
緑の髪をうちふるひ
雄馬は人に 随（したが）ひて
箱根の嶺（みね）を下（くだ）りけり
胸は踴（をど）りて八百潮（やほじほ）の
かの蒼溟（わだつみ）に湧くごとく
喉（のど）はよせくる春濤（はるなみ）を
飲めども渇（かわ）く風情あり
目はひさかたの朝の星
睫毛（まつげ）は草の 浅緑（あさみどり）

うるほひ光る眼瞳(ひとみ)には
千里(ちさと)の外(ほか)もほがらにて
東に照らし西に入る
天つみそらを渡る日の
朝日夕日の行衛(ゆくへ)さへ
雲の絶間に極むらん
二つの耳をたとふれば
いと幽(かすか)なる朝風に
そよげる草の葉のごとく
蹄(ひづめ)の音をたとふれば
紫金(しこん)の色のやきがねを

高くも叩(たた)く響あり
狂へば長き鬣(たてがみ)の
うちふりうちふる乱れ髪
燃えてはめぐる血の潮(しほ)の
流れて踴(をど)る春の海
噴(は)く紅(くれなゐ)の光には
火炎(ほのほ)の気息(いき)もあらだちて
深くも遠き嘶声(いななき)は
大神(おほがみ)の住む梁(うつばり)の
塵(ちり)を動かす力あり
あゝ朝鳥(あさとり)の音をきゝて

富士の高根の雪に鳴き
夕つげわたる鳥の音に
木曽の御嶽(みたけ)の巌(いは)を越え
かの青雲(あをぐも)に嘶(いなな)きて
天(そら)より天(そら)の電影(いなづま)の
光の末に隠るべき
雄馬の身にてありながら
なさけもあつくなつかしき
主人(あるじ)のあとをとめくれば
箱根も遠し三井寺や
日も暖(あたたか)に花深く

さゝなみ青き湖の
岸の此彼(こちごち)草を行く
天の雄馬のすがたをば
誰かは思ひ誰か知る
しらずや人の天雲(あまぐも)に
歩むためしはあるものを
天馬の下(お)りて大土(おほつち)に
歩むためしのなからめや
見よ藤の葉の影深く
岸の若草香(か)にいでて
春花に酔ふ蝶(ちょう)の夢

そのかげを履（ふ）む雄馬には
一つの紅（あか）き春花（はるはな）に
見えざる神の 宿（やどり） あり
一つうつろふ野の色に
つきせぬ天のうれひあり
鳴呼鷲鷹（わしたか）の飛ぶ道に
高く懸（かか）れる大空の
無限（むげん）の絃（つる）に触れて鳴り
男神（をがみ）女神（めがみ）に 戯（たはむ） れて
照る日の影の雲に鳴き
空に流るゝ満潮（みちしほ）を

飲みつくすとも渇(かわ)くべき
天馬よ汝(なれ)が身を持ちて
鳥のきて啼(な)く鳰(にほ)の海
花橘(はなたちばな)の蔭を履(ふ)む
その姿こそ雄々しけれ

牝馬(めうま)

青波(あをなみ)深きみづうみの
岸のほとりに生れてし
天の牝馬は東(あづま)なる

かの陸奥（みちのく）の野に住めり
霞に霑（うるほ）ひ風に擦（す）れ
音（おと）もわびしき枯くさの
すゝき尾花にまねかれて
荒野（あれの）に嘆く牝馬かな
誰か燕（つばめ）の声を聞き
たのしきうたを耳にして
日も暖かに花深き
西も空をば慕はざる
誰か秋鳴くかりがねの
かなしき歌に耳たてて

ふるさとさむき遠天（とほぞら）の
雲の行衛（ゆくへ）を慕はざる
白き羚羊（ひつじ）に見まほしく
透（す）きては深く柔軟（やはらか）き
眼（まなこ）の色のうるほひは
吾（わ）が古里（ふるさと）を忍べばか
蹄（ひづめ）も薄く肩瘦（や）せて
四つの脚（あし）さへ細りゆき
その鬣（たてがみ）の艶（つや）なきは
荒野（あれの）の空に嘆けばか
春は名取（なとり）の若草や

病める力に石を引き
夏は国分（こくぶ）の嶺（みね）を越え
牝馬にあまる塩を負ふ
秋は広瀬の川添（かはぞひ）の
紅葉（もみぢ）の蔭にむちうたれ
冬は野末に日も暮れて
みぞれの道の泥に饑（う）ゆ
鶴よみそらの雲に飽き
朝の霞の香に酔ひて
春の光の空を飛ぶ
羽翼（つばさ）の色の嫉（ねた）きかな

獅子(しし)よさみしき野に隠れ
道なき森に驚きて
あけぼの露にふみ迷ふ
鋭き爪のこひしやな
鹿よ秋山妻恋(あきやまつまごひ)に
黄葉(もみぢ)のかげを踏みわけて
谷間の水に喘(あへ)ぎよる
眼睛(ひとみ)の色のやさしやな
人をつめたくあぢきなく
思ひとりしは幾歳(いくとせ)か
命を薄くあさましく

思ひ初(そ)めしは身を責むる
強き軛(くびき)に嘆き侘(わ)び
花に涙をそゝぐより
悲しいかなや春の野に
湧(わ)ける泉を飲み干すも
天の牝馬のかぎりなき
渇ける口をなにかせむ
悲しいかなや行く水の
岸の柳の樹の蔭の
かの新草(にひぐさ)の多くとも
饑ゑたる喉(のど)をいかにせむ

身は塵埃(ちりひぢ)の八重葎(やへむぐら)
しげれる宿にうまるれど
かなしや地(つち)の青草は
その慰藉(なぐさめ)にあらじかし
あゝ天雲(あまぐも)や天雲や
塵(ちり)の是世(このよ)にこれやこの
轡(くつわ)も折れよ世も捨てよ
狂ひもいでよ軛(くびき)さへ
嚙み砕けとぞ祈るなる
牝馬のこゝろ哀(あはれ)なり
尽きせぬ草のありといふ

天つみそらの慕はしや
渇かぬ水の湧くといふ
天の泉のなつかしや
せまき厩（うまや）を捨てはてて
空を行くべき馬の身の
心ばかりははやれども
病みては零（お）つる泪（なみだ）のみ
草に生れて草に泣く
姿やさしき天の馬
うき世のものにことならで
消ゆる命のもろきかな

散りてはかなき柳葉（やなぎは）の
そのすがたにも似たりけり
波に消え行く淡雪（あはゆき）の
そのすがたにも似たりけり
げに世の常の馬ならば
かくばかりなる悲嘆（かなしみ）に
身の苦悶（わづらひ）を恨（うら）み侘び
声ふりあげて嘶（いなな）かん
乱れて長き鬣の
この世かの世の別れにも
心ばかりは静和（しづか）なる

深く悲しき声きけば
あゝ幽遠（かすか）なる気息（ためいき）に
天のうれひを紫の
野末の花に吹き残す
世の名残こそはかなけれ

鶏（にはとり）

花によりそふ鶏の
夫（つま）よ妻鳥（めどり）よ燕子花（かきつばた）
いづれあやめとわきがたく

さも似つかしき風情（ふぜい）あり
姿やさしき牝鶏（めんどり）の
かたちを恥づるこゝろして
花に隠るゝありさまに
品かはりたる夫鳥（つまどり）や

雄々しくたけき雄鶏（をんどり）の
とさかの色も艶（えん）にして
黄なる口觜（くちばし）脚蹴爪（あしけづめ）
尾はしだり尾のなが〳〵し

問ふても見まし誰(た)がために
よそほひありく夫鳥(つまどり)よ
妻守(つまも)るためのかざりにと
いひたげなるぞいぢらしき

画にこそかけれ花鳥(はなどり)の
それにも通ふ一つがひ
霜に侘寝(わびね)の朝ぼらけ
雨に入日の夕まぐれ

空に一つの明星の
闇行く水に動くとき
日を迎へんと鶏の
夜(よる)の使(つかひ)を音(ね)にぞ鳴く

露けき朝の明けて行く
空のながめを誰(たれ)か知る
燃ゆるがごとき紅(くれなゐ)の
雲のゆくへを誰(たれ)か知る
闇もこれより隣なる

声ふりあげて鳴くときは
ひとの長眠（ねむり）のみなめざめ
夜は日に通ふ夢まくら

明けはなれたり夜はすでに
いざ妻鳥（つまどり）と巣を出（い）でて
餌（ゑ）をあさらんと野に行けば
あなあやにくのものを見き

見しらぬ鶏（とり）の音（ね）も高に
あしたの空に鳴き渡り

草かき分けて来るはなぞ
妻恋ふらしや妻鳥(つまどり)を

ねたしや露に羽(はね)ぬれて
朝日にうつる影見れば
雄鶏(をどり)に惜(を)しき白妙(しろたへ)の
雲をあざむくばかりなり

力あるらし声たけき
敵(かたき)のさまを懼(おそ)れてか
声色(いろ)あるさまに羞(は)ぢてかや

妻鳥(めどり)は花に隠れけり

かくと見るより堪へかねて
背をや高めし夫鳥(つまどり)は
羽(は)がきも荒く飛び走り
蹴爪に土をかき狂ふ

筆毛(ふでげ)のさきも逆立(さかだ)ちて
血潮(ちしほ)にまじる眼のひかり
二つの鶏(とり)のすがたこそ
是(これ)おそろしき風情(ふぜい)なれ

妻鳥(めどり)は花を馳(か)け出でて
争闘(あらそひ)分くるひまもなみ
たがひに蹴合ふ蹴爪(けづめ)には
火焔(ほのほ)もちるとうたがはる

蹴るや左眼(さがん)の的(まと)それて
羽(はね)に血しほの夫鳥(つまどり)は
敵の右眼(うがん)をめざしつゝ
爪も折れよと蹴返しぬ

蹴られて落つるくれなゐの
血潮の花も地に染みて
二つの鶏（とり）の目もくるひ
たがひにひるむ風情なし

そこに声あり涙あり
争ひ狂ふ四つの羽（はね）
血潮（のり）に滑りし夫鳥（つまどり）の
あな仆（たふ）れけん声高し

一声長く悲鳴して

あとに仆るゝ夫鳥の
羽（はね）に血潮の朱（あけ）に染（そ）み
あたりにさける花紅（あか）し

あゝあゝ熱き涙かな
あるに甲斐なき妻鳥は
せめて一声鳴けかしと
屍（かばね）に嘆くさまあはれ

なにとは知らぬかなしみの
いつか恐怖（おそれ）と変りきて

思ひ乱れて音（ね）をのみぞ
鳴くや妻鳥（めどり）の心なく

我を恋ふらし音（ね）にたてて
姿も色もなつかしき
花のかたちと思ひきや
かなしき敵とならんとは

花にもつるゝ蝶（ちょう）あるを
鳥に縁（えにし）のなからめや
おそろしきかな其の心

なつかしきかな其の情（なさけ）
紅（あけ）に染（そ）みたる草見れば
鳥の命のもろきかな
火よりも燃ゆる恋見れば
敵（てき）のこゝろのうれしやな

見よ動きゆく大空の
照る日も雲に薄らぎて
花に色なく風吹けば
野はさびしくも変りけり

かなしこひしの夫鳥（つまどり）の
冷えまさりゆく其（その）姿
たよりと思ふ一ふしの
いづれ妻鳥（めどり）の身の末ぞ

恐怖（おそれ）を抱く母と子が
よりそふごとくかの敵に
なにとはなしに身をよする
妻鳥のこゝろあはれなれ

あないたましのながめかな
さきの楽しき花ちりて
空色暗く一彩毛(ひとはけ)の
雲にかなしき野のけしき

生きてかへらぬ鳥はいざ
夫(つま)か妻鳥(めどり)か燕子花(かきつばた)
いづれあやめを踏み分けて
野末を帰る二羽の鶏(とり)

松島瑞巌寺(ずいがんじ)に遊び葡萄(ぶどう)

栗鼠（きねずみ）の木彫を観て

舟路（ふなぢ）も遠し瑞巌寺
冬逍遥（ふゆじょうよう）のこゝろなく
古き扉に身をよせて
飛騨（ひだ）の名匠（たくみ）の浮彫（うきぼり）の
葡萄のかげにきて見れば
菩提（ぼだい）の寺の冬の日に
刀悲（かたなかな）しみ鑿愁（のみうれ）ふ
ほられて薄き葡萄葉の
影にかくるゝ栗鼠よ

姿ばかりは隠すとも
かくすよしなし鑿(のみ)の香(か)は
うしほにひゞく磯寺(いそでら)の
かねにこの日の暮るゝとも
夕闇(ゆふやみ)かけてたゝずめば
こひしきやなぞ甚五郎

底本：「藤村詩集」新潮文庫、新潮社
　　1968（昭和43）年2月10日発行
　　1997（平成9）年10月15日55刷
※ルビの一部を新仮名遣いとする扱いは、底本通りにしました。
入力：佐野女子高等学校2-1（H11）
校正：門田裕志、小林繁雄
2005年5月8日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。